

フエ研究からみたベトナム・東南アジア・ 東アジア研究における可能性

西村昌也

Research Potentiality in Vietnamese, Southeast and East Asian
Studies Viewed from Hué

NISHIMURA Masanari

キーワード：城隍神、ディン、墓制、建築、北部と中部ベトナム

1. はじめに

これまでの考古学や歴史学の研究では、キン族揺籃の地は北部ベトナムであり、中部ベトナム北域へのキン族の移住は14世紀初頭前後に始まったと考えられる。チャンパの陳朝ベトナムへの烏・里2州の割譲（1306年）、黎聖宗のチャンパ親征（1470-1471年）、阮潢^{グエン・ホアン}の順化入府（1558年）など、幾つかの政治史的な大事件を画期としながら、北部からの入植が継続的に進んだようだ。

従って、われわれがフエ地域で目にするキン族文化は14-15世紀頃を上限とする過去の北部ベトナム時代のキン族文化を継承している可能性が高い。そして、北部ベトナムとフエ地域の現在のキン族文化を比較すると、幾つかの差異に気づく。ここではその実例を挙げて、最後にその理由を少し検討しておきたい。

ただ、筆者は以下記すことに関して、特に統計的な調査や深い実地調査を行ってきたわけではなく、自身のこれまでの調査活動中に見聞したことを主たる根拠にしており、学問的実証性が弱いことは筆者自身が認めるところである。ただし、そうした見聞から導き出す仮説については、これまでベトナム文化の研究においてさほど真剣に論議された様子もない。ベトナムあるいはキン族の文化を時空軸上において構造的に捉える必要を感じるため、敢えて論じることにした。

2

2.1 デンとディン

北部ベトナムの集落（村）の場合、村の中心的信仰建築として^{デン}đền（字喃では殿）と^{ディン}Đình（亭）がある。デンは、日本の神社に比較対比可能なもので、歴史的人物を神として祭っており、祭礼がそこで行われ集落信仰の中心拠点の一つとなる。ディンは村の共同集会所などと訳されることもあり、年頭などに行われる村祭りの中心地になることが多い。

フェ地域では、デンをほとんど見かけることはなく、集落の信仰建築の中心はディンである。各集落には必ずディンがあり、そこで集落の祭祀も行われている。ディンの主屋では基本的に集落を立村したとされる人物が開耕神として祀られているのが一般的である。

デン（殿）は、字義的には殿（ディエン）と差異をはかるために土偏をつけ字喃化したものと思われる。殿は都城内建築を指すものにも使われてきているが、フェではフォン河中流河岸に祀られた恵南殿のようにフェの在地信仰建築にも用いられている。おそらく、キン族がその故地である北部から中へ向かって出発しはじめた15-16世紀頃には、まだ北部においてはデンという呼称あるいは建物は出現しておらず、亭が集落としての信仰や活動を掌っており、そのまま中部にもたらされ根付いたのではないだろうか？

2.2 城隍神

北部では城隍神は、ディンなどに祀られているのが一般的である。そして、城隍神は基本的に自然界の驚異的存在や歴史上人物などを城隍神として祀っている。『大越史記全書』では、李朝は遷都直後の1010年に、昇龍都城内に城隍神を祀るという記述があり、北部ベトナムで城隍神を祀る習慣が少なくとも朝廷レベルで早くから根付いていたことを理解できる。

しかし、フェ地域の場合、小規模ではあるが、独立した城隍神廟が建てられており、そこに城隍神が祀られている場合が多い。また、その城隍神は一般的に抽象的で、具体的人物神や自然神名をあてがわれているわけではない（図1）。これは中国の本来の城隍神信仰に近い信仰形態と思われる。本紀要のチャン・ディン・ハン論文¹⁾を参照して頂ければよいが、フェでも人神が城隍神化されている例はあるものの、阮朝期の後半以降のことで、古いことではない。

2.3 葬制と墓地

北部ベトナムでは、一般的に死者は木棺に納めて土葬後に、3年経てば掘り返し、洗骨して二次葬用の棺桶に納めて再埋葬する。この埋葬習俗は北部ベトナムの場合、南限はハティン（Hà Tĩnh）省まで確認できる。ところが、クアンチ（Quảng Trị省）以南では、この洗骨・再葬習俗は一般的習慣となっていない。例えば、フェ地域では、死者を木棺に納めて埋葬し、その上に墓を造成するのが一般的である。再葬は墓を移設しなければならない時など、非常に限定的にしか行われていない。

1) チャン・ディン・ハン 2012年“フェ地域におけるキン族の城隍神とタインフック村の事例”本紀要論文

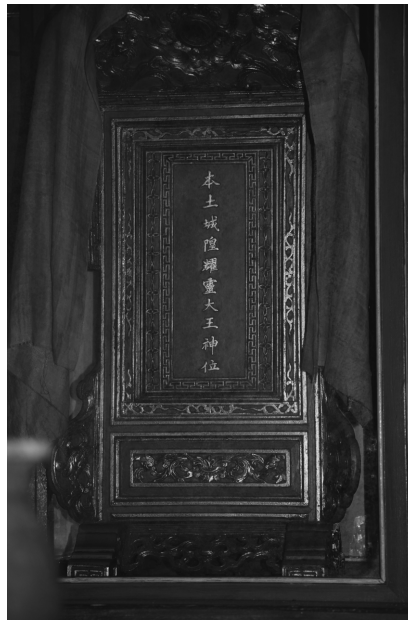


図1 𡇗a Linh 亭本屋の城隍神位牌

また北部の再葬習慣については、現在利用可能な考古学資料の検討²⁾ から、その一般化はおよそ20世紀初等くらいにまでしか遡らず、その時期においても、再葬を行わないケースがあったと推定されることを述べた。当然、再葬が普及する以前は、木棺を用いた土葬による一次葬である。

ところで、北部では、集落の外れに共同の墓地を形成しているのが通常である。もちろん中部もそうであるが、フエ地域では郊外に墓地を形成する場合がある。それはフエ都城から南の丘陵・山岳地帯である（本紀要、篠原論文参照）。バオヴィンやディアリンにおいては、多くの有力ゾンホ（族）が、御廟山（Núi Ngũ Bình）周辺を中心に、丘陵・山岳地帯に墓地を形成している例が見られた。これは風水思想に基づいて、墓を高燥の地に選地せんとする慣習であるが、経済的条件（墓所となる土地の購入や管理が可能となること）などを揃えなければ不可能である。18世紀を下限とする地理情報が掲載される『洪徳版図』に納められた『甲午年平南図』には、既に広南阮氏の陵墓がこうした地域に選ばれていることを示す絵地図が残されているし、阮朝期の陵墓も引き続きそのような地域に造営されている³⁾。また、我々の調査した明郷（現 Minh Hương）の場合も、すでに17世紀後半時点でこうした地域に墓を造営するのが一般的であったようだ⁴⁾。興味深いのは末成道男氏が調査される清福では、そのような例が無いという（末成私信）。

王朝権力者達が歴史的に好んだ地であり、そうした立地習慣を官僚や富裕者がまねたことは想像に難

2) 西村昌也 2011年『ベトナムの考古・古代学』同成社

3) 詳細はファン・タイン・ハイアリ2012年“フエの阮朝期の皇族の陵墓について”『周縁の文化交渉学シリーズ3 陵墓からみた東アジア諸国の位相——朝鮮王陵とその周縁』：129-153.

4) 『承天明郷陳氏正譜』（陳荊和撰1964年）で、始祖の陳養純（原籍福建省漳州府龍溪縣1688年没）は香水縣安舊社の丘陵地に葬られ、その位置が子孫により確認されている（Trần Tiên Linh & Trần Tiên Trí ed. 2005 *Hồ Trần Tiên Minh Hương: hệ thống thờ tự, gia phả, lăng mộ*）。

くない。また、こうした高燥の地に墓地を形成する慣習は、東南アジア各地の華僑や台湾・福建・広東などでも見られる慣習であり、(墓地)風水思想とともに、もともとは中国系移民が持ち込んだ文化であることが理解できる。

2.4 家屋建築

林のフェ地域を中心とする古建築研究⁵⁾によれば、伝統的民家の基本構造である梁行構造が、クアンビンあたりを境に北部と中南部で全く異なることが指摘されている。また、フェ地域では、Miếu (廟：図2) や Âm (庵：図3) の信仰建築に、高床式の住居をベースにした小建築がみられる。北部では、デイン建築に高床式建築の名残を見ることができるとは、写真で紹介するような単純な作りのもはなかなか見ることができない。フェ周辺のケースは、より古式の建築形態をとどめているのではないかと推測する。



図2 古式の廟 (Phu Luong)



図3 Bao Vinh Hạ での屋敷内の Âm

2.5 石碑

篠原の詳細な研究(本紀要、篠原論文参照)にあるように、北部と中部では石碑の様式が全く異なる。中部の場合、ダナン市南郊の五行山の洞窟壁に刻まれた『普陀山靈中仏』碑(図4：有名なホイアンの日本町“日本堂”などを記したもの)が、筆者の知る中部ベトナム最古の碑刻例である。この碑刻には、すでに碑身下に碑趺を配されたものであり、篠原が述べる中部ベトナム碑刻の特徴の一部を備えている。

5) Hayashi Hideaki 2010 Đặc trưng trong phương pháp thiết kế kiến trúc gỗ truyền thống ở miền Trung, Việt Nam, trong Nguyễn Quang Trung Tiến và Nishimura Masanari *Văn hóa-lịch sử Huế qua góc nhìn làng xã phụ cận và quan hệ với bên ngoài*. NXB Thuận Hoá: 319-342.



図4 五行山洞穴内に刻まれた普陀山霊中仏

この後、碑首が連弧形になり、その特徴が進化するようである。

2.6 タイなどとの繋がりへ

西山朝期から阮朝期にかけて、当時の社会情勢混乱の故か、清化からフエ域を中心に、かなり多くのベトナム人がタイのバンコックなどへ移住している⁶⁾。

バンコックには、当時のベトナム人により建立された仏教寺院⁷⁾や、彼らが居住した通り（安南舗）なども、中国人居住区などに残っており、かなりの人口規模があったと想定される。このベトナム移民によりもたらされた文化の一つに、仏教があり、タイではタイ仏教諸派のなかに、大乘仏教として中国系とベトナム系（Annam nikai）の2派が、公的に存在を認められている。そうした仏教寺院中には、ベトナムから伝えられた教典や仏像などが保管されているが、なかにはフエ郊外の仏教寺院（順化処香茶県實林寺⁸⁾）に所蔵されていた明命年間の木版なども保管されている。

3. まとめ

3.1 北部と中部の差異から考える文化変容過程

北部ベトナムと中部ベトナム両地域間において、キン族文化における基本的差異がみられることを指

6) Peter A. Poole 1970 *The Vietnamese in Thailand*. Cornell university Press, 桜井由躬雄 1979年「在泰京越南寺院景福寺所蔵漢籍字喃本目録」（『東南アジア——歴史と文化——』No.8：73-117頁. 西村昌也 2009年「バンコック・ヴェトナム系仏教寺院におけるヴェトナム系ならびにタイ系梵鐘について」『東アジア文化交渉研究』2号：165-175頁.

7) 桜井、前出. 西村、前出.

8) 同名の寺が現在、Hương Thủy 県 Dương Xuân Thượng にある。

摘してみた。この差異をもたらした原因について考察してみたい。

城隍神信仰における神名の有無やデンの有無、そして再葬習慣の有無などといった差異は、北部から中部にキン族が移住してくる段階に持っていた文化と、その後の北部での文化変容後の差異を表していると思う。

この推測は、中国の城隍神信仰ではもともと具体的神名をもたないものであること。ベトナムでは李朝期には城隍神信仰が存在していたと考えられること（『大越史記全書』）。デン（塚）がディエン（殿）からの造語であると考えられること。北部ベトナムで再葬習慣が現れるのは非常に新しい時代という考古学的知見⁹⁾などを根拠としている。つまり、中部ベトナムのキン族文化に、より古い時期のものが含まれているという結論となる。これらの現象は、もともと北部ベトナムに存在しなかったものがある時期から普遍化したか、あるいはもともとあった文化から変容して成立したものと考えられる。

ただし、こうした解釈を全ての中中部キン族文化に当てはめるのは無理であろう。例えば、高燥の地に墓地を選定する習慣は、明らかに中国系移民が伝え、その後広まった文化であろう。先述したように広南阮氏時代（17世紀後半）にすでに確立されており、東南アジアにおける明末清初の華人の大量移住を契機とする可能性もあるだろう。また、これに準じて考えなくてはいけないのが五行神信仰であろう。万物が火、水、木、金、土の五元素からなるという五行思想を体現した五行廟（図5）が明郷の集落に鎮座していたし、明郷のみならず、フェ地域の各集落で五行廟自体は普遍的である。北部ベトナムでは耳慣れない存在であるし、もちろん現中国ではほとんどみられない伝統信仰形態でもある。

家屋建築や碑文の様式の差はどのように中国南部との比較研究が必要で、安易な判断は下したくない。ただし、キン族が中部ベトナムに入植した後に、外来の文化を加味しつつ独自の様式へ進化させた可能性も否定はしない。建築や墓制に見られるように、クアンビン省あたりを境に、北部と中部の間見られる文化現象の差異は、フェを中心とする広南阮氏から阮朝にかけての各政権と北部地域の伝統的文化母体とのせめぎ合いともとれよう。



図5 Minh Hườngの五行廟の位牌

9) 西村、2011年、前掲書。

3.2 おわりに

地域間比較を行うことにより、空間軸と時間軸を利用しながら、文化のより重層的な復元ができる可能性を指摘してみた。上述のタイにおけるベトナム仏教なども、比較研究をすることにより、新たな認識をもたらされるのかもしれない。こうした方法論は、かつての周圏論となんら変わるものではなく、その可能性の限界も存在する。ただし、南北に長いベトナムで、長期の南進の歴史をもつキン族研究などには応用可能性がまだまだあることを強調しておきたい。

